



ブルシーロフ病院

～建設進む(!?)新病棟～

2月14日、移住者の村にあるブルシーロフ病院を訪問。さっそく新病棟の建設現場へ。広大な敷地の中央に、建設中の数棟が見える。うち2階建て1棟と平屋建て1棟がほぼ完成。内科と小児科にあてられるとのこと。



「チェルノブイリ15周年の、4月26日に完成式をする」と、ナタリヤ・トロツェンコ院長が胸を張った。しかし、北野さんによると、1年前とあまり変わらず、外観上は、窓枠が付いたくらいの変化しかないとのこと。周囲はぬかるみばかりで、はるか向こうに見える移住者の村からどうやってここまでたどり着くのか。院長室に掲げられた設計図では、「2001年完成部分」「2003年完成部分」「それ以降」とに色分けされていて、全て完成すれば、巨大な治療センターのようなものが出来上がるはず。今回完成予定の2棟は、2001年度分のほんの一部といったところか。資金難で予定通りにいかないとのことである。

本院にもどり、案内された病院の中は、かなり活気に満ちていた。5年前に「救援・中部」が救援を始めるまでの、荒れ果てた印象とは大違い。「救援・中部」が贈った心電計で、兵役をひかえた17歳の少年達が、大勢検査を受けていた。(松田)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-メール：chachubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.com

今回、現地入りの際、ちょっとしたトラブルがあり(濃霧により、飛行機がボリスポリ空港に着陸できず、代替空港のオデッサに降り、そこからボリスポリ空港までバス8時間、空港からジトーミル州まで3時間、明け方4時頃に病院官舎に到着)、その日は半日仕事にならず、日程が1日ずれ込んでしまった。また、日曜日で幸いだったのかもしれないが、翌日からは超ハード・スケジュールとなった。

今回渡航の目的は、前回渡航時の課題であった

- (1) 医療機器の絶対数不足
 - (2) 医療技術者等の専門家が存在せず、特殊治療疾患(血液成分分離法・各種血液疾患の治療・呼吸療法全般等)の実施困難、院内医療機器が故障し、修理できず使用不能状態
 - (3) 人工呼吸器回路・気管カニューレ等の診療材料の不足
 - (4) 州立小児病院における医療技術者の養成
 - (5) 州立医科専門学校医療技術科の設置具体化
- などであり、また、チェルノブイリ救援・中部により1991年以降、現地医療施設に寄贈された医療機器の使用状況・所在確認、そして、定期的な点検・修理等を行うことであった。



<人工呼吸器の修理をする北野さん

(州立小児病院) >

活動報告

<ジトーミル州立小児病院>

☆医療機器点検・修理業務

(1) NICU(新生児集中治療室)において

酸素濃度計1台・パルスオキシメーター2台・心電図モニター1台・新生児用人工呼吸器3台・保育器1台の修理実施。…今回の渡航で修理した新生児人工呼吸器などは、故障して修理できず、使用不能状態であった。その間、装着する人工呼吸器の予備はなく、「…数十名の患児が亡くなった…」と聞かされた。

(2) 特殊疾患治療室において

保育器3台・紫外線照射装置1台の修理実施。

☆臨床技術指導

- (1) 呼吸療法・人工呼吸管理について指導。
- (2) 呼吸肺理学療法・気管支喘息重責発作対処法。
- (3) 医療機器・診療材料等使用説明。
- (4) 保育器管理について指導。



<人工呼吸器の操作説明を受けるセクション長>

☆院内講義（ジトーミル州立小児病院講義室にて）

- (1) 呼吸肺理学療法・気管支喘息重積発作対処法。
- (2) 医療機器安全管理学・医療機器取扱い。
- (3) 呼吸療法人工呼吸管理について実技指導。
日本から持参したマニュアル配布。
医師・看護職等40名が参加してくれた。

☆その他

中古パルスオキシメーター（N-290）1台寄贈、新生児用人工呼吸器回路30mのほか他診療材料提供。

<ブルシロフ地区病院>

寄贈医療機器の所在確認、使用状況確認。

●から持参の中古ポータブル心電計（ECG-6303）寄贈、操作説明。…精密医療機器のため、手荷物となり道中、税関検査のチェックを何度となく受け…苦労した。

<ジトーミル市立小児病院>

今回、渡航日程予定外であったが、内視鏡・心電計の修理要請あり訪問。内視鏡2台・心電計2台修理実施。心電計は1973年製の28年ものであった。



<院内講義の様子（州立小児病院）>



<心電計の贈呈（ブルシロフ病院）>

以上が活動報告であるが、今回の渡航で前回渡航時の課題の大半は解決することができた。ただ、「州立医科専門学校医療技術科の設置」「州立小児病院における医療技術者の養成」に関しては、時間を要し、実現はすぐには困難であるが、当面、州立小児病院など院内講義からはじめ、講座を設けると同時に准医師・看護職の中から臨床工学技士（アシスタント・ドクター・クリニカル・エンジニア）等の医療技術者を養成するのも近道であると言える。

帰国後、私は日本国内の各病院で廃棄になった中古医療機器を受け取り修理・点検し、先日、河田事務局長・原さん・山盛さん・運営委員の皆さんのお力により、ようやく船便コンテナに積むことができた。保育器3台・心電計3台・診療材料等船便でジトーミル州の各病院へ配分される。「一人でも多くの患児、患者の方々を救って欲しい…」との願いからである。今後とも被災された現地の方々が、自国にて自立できるよう継続支援していきたい。～とどけ鳥～愛と平和を載せて！～1986. 4. 26のチェルノブイリ原発事故から、15年目を迎えようとしている。原発の恐ろしさを、これからの子ども達にも知ってもらいたい…。2度と起きないことを願って…。



<入院中のカーリーナちゃん（州立小児病院）>

ウクライナを訪ねて

「いったい何があったんでしょうか？」

2月19日、出発のときと変わらない雪景色の停留所で、降りたバスを見送り、迎えの車で我が家に帰り着いて…。夢だったんでしょうか…。翌日スーツケースが届きました。夢でなんかあるものですか！見てきました。感じてきました。果てしなく続く大地、人類が再び耕すことが出来る日はもうありえない大地。

閉鎖地域へのゲートをくぐり、'86年7月に強制疎開させられたポリシーネクリシー村を訪ねました。薄く雪に覆われた、モノクロの世界の中に残されて建つ教会堂の、緑色がかかった外壁の色は澄んで美しかった。誰も訪れるはずのない内部は更に色彩的。きちんと整えられていて…誰がやっているのだろうか？この村にただ一人残留するナースチャさん(62歳)だろうか？

彼女の家にも訪問することが出来ました。祖父の代からのこの家で、生まれ育ち、激動の時代を生き、あのことを体験し、肉親も隣人も奪われ…にもかかわらず、ここで犬と猫と、まだ切られていない有線ラジオを友として、年に何回か訪れる人を待つ日々を重ねて、もう15年にもなろうとしているのです。壁に掛けられたアイコンの前の粗末な台に、ローソクとマッチ、擦り切れて変色した聖書と眼鏡が置かれていました。彼女が畏れているものはチェルノブイリではないと思った。いったい何があったんでしょうか。これから少しずつこの旅で感じたままを書いてみようと思います。支えてくださった皆様に感謝を込めて!!

(倉田節子)



＜犬と猫と、まだ切られていない有線ラジオを友として……ナースチャさんと倉田さん＞

ウクライナ訪問の仕事を終えて 2001.2.9~2.19

今回のウクライナ訪問は、北野さん、倉田さん、松田、それぞれに目的を果たすことができた。私は「日本の友からウクライナの友へのメッセージ」を数十人の人々に手渡すことができた。市民、入院している人、被災者協会、消防署の人、ナロジチやブルシーロフの地区委員の人々、ジャーナリスト等など。大きな体の消防士さんが「私達は、こんな小さな日本の子ども達に助けられているのだ」と涙ぐんでいた。日本の市民の思いをダイレクトに伝えることはできた。しかし、少数の人々に伝わったにすぎない。ナロジチではカゼのため病院、学校などが閉鎖され、町はひっそり。だが伝える作業は今後も続けられねばならない。それによって現地の被災者の声や思いもこちらにダイレクトに伝わってくるのではないだろうか。

もう一つの仕事は、日本のKさんの文通相手であるザクーシロさん一家をコーラステンに訪問することだった。チェルノブイリ被災家族との文通が続いている数少ないケースである。Kさんに代わってザクーシロ一家から心温まる歓迎を受けた。彼らは病気や故障と闘いながら、仲むつまじく生きている。だが、一家そろってその瞳の中にどこか悲しげなものが感じられる。娘さんのオリガが今年義務教育を終え、「医学校へ行きたい。

い。チェルノブイリ奨学金を受けながら勉強したい」、こう話すオリガの瞳の中には、澄んだ聡明さと強い意志の輝きが見えた。

日本の皆様のクリスマスカードは、ジトーミル市立小児病院では、一部が日本コーナーの掲示板に貼ってあった(写真)。州立小児病院では、子ども達を保育する明るい部屋の中、宝物のように大切に保管されていて、確実に病気の子ども達に届いていた。

(松田)



6月9日は **チェル救デー** チェルノブイリ救援・中部 総会

— 会場：ウイルあいち・セミナー・ルーム(地下鉄市役所2番出口、徒歩10分、市政資料館南) —

NPO法人「チェルノブイリ救援・中部」の2001年度総会を、6月9日(土)に開催します。

チェル救にとっては一番大事な行事ですが、会員や支援の方々が一堂に会する貴重な機会なので、総会だけではなく、この日を **チェル救デー** と位置づけて、講演・報告・展示などの「出し物」の部と、総会と、交流会の3部構成とすることになりました。

第1部 総会(13:30~14:30)

「2000年度の活動報告」「2001年度の活動計画」「理事・監事の改選」etc.

第2部 『チェルノブイリから15年/見て聞いて、汗を流したボランティア』(14:40~16:00)

①ビデオ上映(シトミル消防局映像&NHKアレクシエーヴィッチ「小さき人たちの声」より)

②島田恵写真展(青森・六ヶ所村から)

第3部 懇親会(16:00~17:00)

報告会(2月代表団)をかねて。

お茶を飲みながら楽しい語らい

総会を含め、会員でなくても参加できます。NPO法人チェルノブイリ救援・中部の正会員の募集を行っています。チェルノブイリ救援活動に関心のある方ならだれでもなることができます。会員になりたい方は事務所まで申し出てください。申込書をお渡します。入会金・会費はありません。

総会の内容は次のとおりです。

<来年度の事業計画と予算>

来年度の事業計画と予算は、3月24日の理事会で協議されました。

現在、ほぼ固まっている主な事業は、つぎのとおりです。

①1千万円の特別事業を実施する。これについては、すでに現地側と意見交換を始めている。

②国内のチェルノブイリ救援諸団体に呼びかけて、チェルノブイリ事故15周年の催しを行う。

具体的な計画としては、『チェルノブイリの祈り』の著者スベトラーナ・アレクシエービッチさんの招聘を提案している。

③9月に第3回目のスタディ・ツアーを行う。

④地域におけるチェル救の活動の裾野を広げるための人材育成を目的に、2000年度に引き続き2名を現地に派遣する。

これまで継続的に行っている、医療機器・医薬品の提供、粉ミルクの提供、被災者団体への医薬品費の支援、奨学金等々は、2001年度も続けます。ただし、特別事業費(1千万円)を別にすれば、寄付金・公的助成の漸減にともない、金額的には減少することになる事業もあります。

6月9日(土)は **チェル救デー** のためにスケジュールを空けておいてください。



<バザー風景>

ウクライナへの救援物資、名古屋港から発送

<甦るチェル救の奇跡!!?...救援物資発送顛末記>

今年もまた、年に1回の船便が出ることになった。今回の救援物資は、車イス14台。静岡星美学園小学校の子ども達と親の会の皆さんが、チェルノブイリの子ども達にと貯めたお金で購入して下さった2台と、「NCプランニング」さん(車イスのメンテナンス等をしている会社)や介護用品の会社「多比良」さんからいただいた12台だ。また今回は、2月



<大活躍の大島さん一家>

の代表団として、現地の病院で精力的に医療機器の修理・教育活動をしてこられた、臨床工学技士の北野達也さんが、学会で呼びかけて集めて下さった保育器・心電計・修理用部品等の医療機材、そして他の支援者からも、シーツや毛布・タオルなど病院で使える日用品の寄付をいただき、それらを1つのコンテナに積み送る事となった。

3/21(水)...さて、問題はこの発送作業である。まずは車イスの梱包作業。河田事務局長は五十肩と言うか六十肩と言おうか、痛みが日常化しているし、事務局員(山盛)は肩と背中の痛みでマッサージに通り始めたばかり、もう1名(松田さん)は腰痛持ちと、まあ「痛み=傷み3兄弟」状態で困ったものだ、と思っているところに助っ人が現れた。「大島一家」(時々事務所で会計関係の入力のボランティアをしてくださっている大島さんとその息子さん達)である。特に、息子さん達の10代パワーは抜群で、機敏・パワフル・集中力と3拍子揃っていて(「3兄弟」とはえらい違いだ)、花粉症で流れ出る鼻水ど格闘しながら頑張ってくれた。わが事務局長も痛みをこらえ大奮闘。「3兄弟」は、彼のお陰でなんとか面目(何の???)を保った。

3/23(金)...で次は、いよいよ名港海運への搬入だ。物資はかなりの重量があり、結局クレーン付き大型トラック所有の伊那・原さんに依頼。車イス等の保管場所である事務所と、医療機器の保管場所の北野邸に寄り、名港海運倉庫へ運びこむ段取りとなった。搬入日、原さんは午前4時に伊那を出発、事務局長と合流し、8時より荷積み作業を開始した。医療機器の搬入には、仕事にもかかわらず、病院から北野さんが駆けつけてくれた。

...が、である。「保育器が梱包されていない。はてさて、この状態でコンテナに積載できるかどうか。北野さんが奔走して集めて下さった保育器が、名港海運で受け付けられなかったらどーしよう。」事務局長の頭は、一瞬クラッとなった。一方、山盛はそんな事とは露知らず、名港海運倉庫での作業の為、事務所を後にし、「今日は昼飯抜きだな〜」などとのんきなことを考えながら、地下鉄で現場に向かっていた。丁度「築地口」で下車した時、「携帯」が鳴った。「圏外」。地上に出て原さんの携帯にTEL。「大変なんだ。保育機が梱包されてない。名港海運にTELして相談して欲しい。」事務局長の、緊張と苛立ちの入り混じった声。搬入は3時ごろになりそうとの事。こりゃ何とか搬入時刻までに解決せねばと、早速、目の前の喫茶店に入り、やり取りを始めた。名港海運・名港陸運そして事務局長と、10回程のやりとりの結果、やっと結論が出た。この間およそ1時間。やりとりの途中、「行き先変更か」という事態もあったが、ともかくも名港海運倉庫へと向かった。渋滞気味の名四国道上、少しいライラしていると、どこからか犬の鳴き声がする。「なんでこんなところで犬なわけ?? 車にひかれて、あつというまにミンチになっちゃうー」などと思いつつ窓の外を振り返ると、そこに原さんの顔があった。鳴き声の主は、原さんのトラックに乗っていた愛犬「キーちゃん」なのであつ

た。そんなこんなで、2台の車は名港海運にぎりぎりセーフ。

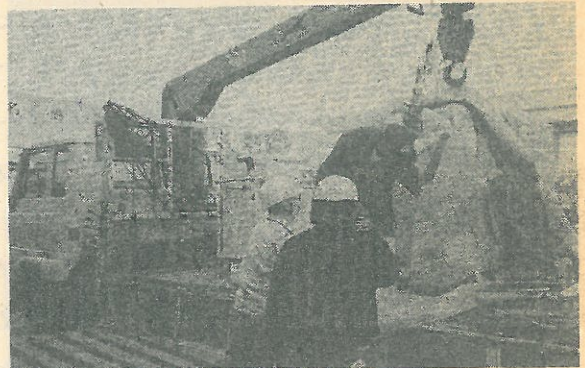
倉庫では、所長さんをはじめ、これら救援物資の通関手続きをしてくださる松井さんら関係者の方々が待っていてくださった。最終的に、松井さんが保育器の状態を見て、「梱包が必要」と判断し、結露でかびが生えないような梱包方法（真空状態にして木箱で梱包）で送る事に決定した。素人ではできない方法だ。「禍が転じて福となる」といった感じ。その他に、梱包されていない機器があったが、所長さんや松井さんらがてきぱきと作業してくださり、保育器以外の全ての物資は名港海運に収められた。さて保育器は、というと、これまた松井さんが、梱包を行ってくれる名港陸運へすでに連絡を取ってくれていて、自ら私達一行をその作業場へと誘導してくださった。そこでも、気さくな担当の方が快く受け取ってくださり、その日は一件落着となった。

久しぶりに「チェル救」らしい展開の一日だった。かつて、救援物資発送作業には、必ずアクシデントがつきものだったが、これまた必ずぎりぎり解決するのだった。その度に、今回の名港海運や名港陸運の方々のように、たくさんの人達のご協力があった。このように、ぎりぎりのところで事態が好転する事を、私達は「チェル救の奇跡」と呼んでいた。そう呼びたい位シビアなことが必ず発生し、肝を冷やしたのだ。久しぶりにそのことを思い出した。

その後、通関の手続きも終了し、救援物資はウクライナのオデッサへと向かった。約50日間の船旅の後、現地へ届けられる。寄付に、そして発送作業や手続きにご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。

(追伸) その後、伊那から3時起きして活躍してくれた原さんは、翌々日から高熱でダウン。河田さんは持病の喘息が出てしまいました。誰かチェル救スタッフの「救援」してくれませんか？

(山盛)



<名港海運の皆さん>

2001年度分ボラ貯申請完了！(3月27日提出済み)

“0金利”で、ボラ貯の利息が激減。私たち申請団体としては、非常にきびしい状況(5年以上継続の団体は、打ち切りの危機)が続いています。しかし、ウクライナ現地の窮状を考えると、申請しない訳にはいきません。2001年度も、今までに贈った医療機器のメンテナンス支援を中心に、総額511万円の申請を行いました。(神野)

大項目	項目別内容(品名・単価・人数・個数等)	金額(円)
(優先希望順位 1位)	部品・消耗品の供給 (1,500千円/一式)	1,500千円
医療機器のメンテナンス支援および指導	専門家派遣	
金額小計	(渡航費一式 300千円/人×1人)	300千円
(優先希望順位 2位)	州立小児病院(被災児支援)	840千円
医薬品の提供	ゼレムリヤ診療所(移住者支援)	200千円
金額小計	ブルシロフ病院(移住者支援)	1,460千円
(優先希望順位 3位)	市立小児病院へ人工呼吸器 1台	
医療機器支援事業	(810千円/台×1台)	810千円
金額小計	810千円	
[配分希望額 総計]		5,110千円

ウクライナ講座 …第1回の報告と次回のお知らせ…

2月17日、栄YWCAにおいて、第1回ウクライナ講座「ウクライナの年中行事&ピーサンキ絵付け教室」が開催されました。

山崎タチアナさんの「ウクライナの年中行事」のお話は、日ウの比較をまじえ、テンポのよいユーモアあふれる語り口で、参加者を1時間たっぷり楽しませてくれました。

年中行事から伺えるウクライナ人の、合理的かつ人情的な国民性がよく分かり、とても興味深いものでした。



<ピーサンキ絵付け教室の様子>

以下は、ピーサンキの絵付けの講師・榎本恭子さんの感想です。

『自分のたまごは気に入っていただけただけでしょうか。キラキラ輝くガラスのピーサンキを見ながら、ウクライナの大地や友人へ思いを馳せることができたでしょうか。

この数十年、絵筆など持ったことがない方たちばかり(?)が学生の頃に返り、どんな絵柄にしようかと悩み、色に迷い、筆を動かせば思うように絵の具がのらず、こんなはずじゃなかったとあきらめ半分、そんなはずはないと期待半分で、オープンで焼き付ける30分間を待ったことでしょう。でも出てきた作品は、小さなたまごの中に夢と希望を封じ込めた、世界でたった一つの自分のピーサンキになったはずです。

このお話をいただいて、準備をし、自分でつくってみて初めて、アンドレイ坂の屋台に並ぶ木製のピーサンキはどんな人がつくっているのかなあ、とピーサンキに体温を感じるようになりました。』

さて、第2回ウクライナ講座は「チェルノブイリ原発事故について…事故から15年…」です。4月26日の「15周年」を前にして、「今までのチェルノブイリ」と「これからのチェルノブイリ」を、救援・中部事務局長・河田昌東さんが、原子力の抱える問題点、放射能による被害の実態など、わかりやすく解説します。ぜひ、ご参加ください。

- ◆テーマ：「チェルノブイリ原発事故について…事故から15年…」
- ◆日時：4月21日(土) 午後1時30分～4時
- ◆場所：名古屋市教育館(地下鉄栄下車：2番・3番・10B番出口すぐ)
052-961-2541
- ◆参加費：500円/人

～チェルノブイリ救援市民グループ連絡会議～ in カタログハウス (東京)

日本国内でチェルノブイリ救援の活動を行っている市民グループが参加して、3月3日、東京の「通信生活」・カタログハウスで連絡会議が行われました。

カタログハウスからは、各グループとも多大なサポートを受けていて、毎年一度、一堂に会して情報交換や交流の場を提供してもらっています。当日は北海道・長野から広島・九州まで14グループ20数名の他、駐日ベラルーシ大使館や来日中のカタログハウス・モスクワ事務所の方も出席され、それぞれの活動報告や抱える悩み、問題提供など、密度の高い会議となりました。

チェルノブイリの救援活動といっても内容は多彩で、現地医療機関への医療支援、チェルノブイリの子ども達を日本に招く里親活動、奨学金制度など各グループにより独自性を持っています。その中で、それぞれに蓄積したノウハウや情報を交換し、協力できるところで協力するということが話されました。私達、チェルノブイリ救援・中部では、「チェルノブイリの祈り」(岩波書店)の著者でジャーナリストの Svetlana・Alexeevna・Pech さんをベラルーシから招き、日本国内で連続講演会を行いたいという提案を出しました。「チェルノブイリ」を体験した人々を幅広くインタビューして、チェルノブイリを検証しつづけ、またアフガン戦争など、小さき人々の声に耳を澄ませ権力の干渉を受けながらも戦争をテーマにしている彼女の話しを聞く機会が、うまくいけば来年度に持てるかも知れません。(京)

☆ もうホームページは見ていただけましたか？

NPO 特定非営利活動法人

チェルノブイリ救援・中部へようこそ



夕方にはお客さんを呼んで新しい家での生活に喜びもひとしおでした。

でも、夜になってあの恐ろしい瞬間が起きました。避難があり、新しい生活もみな夢のものになってしまったのです。それでも、その後ずいぶん長い間、

生まれた土地に戻れるのだと信じていました。
アヌーシカ・ポブキン8歳

お知らせ

チェルノブイリ救援中部の組織概要

救援・中部のあゆみ

現在の活動

現地の状況

今までに発行された機関誌 (ポレーシエ)

現地の学生への奨学金

会計報告

竹内高明のウクライナ通信

金子透のウクライナ・スナップ

ゲストブック

リンク

<http://www.chernobyl-chubu-jp.com>

<http://www.debug.co.jp/ukraine/top.html> にもあります。

奨学生からの手紙



私はガエブスカヤ ナターリヤです。イルジャンスクで1982年8月11日に生まれました。1999年にアグロ-エコロジカルアカデミーの環境学部に入りました。

私の父は運転手です。母は帳簿係の仕事をしていましたが、現在は年金受給者です。第2度の傷病者です。妹のオクサナは13歳で亡くなりました。

私は絵を描くことや写真を撮ること、読書が好きです。好きな勉強は法律学で、弁護士になるのが夢です。しかし、ある理由で夢が実現するかどうかは分かりません、それはお金です。私の両親はもうすぐ離婚し、母は私を助けられず、父は再婚します。そういう訳で、私の問題は父のためではないのです。

*

*

*

*

*



私はショスタク オレーナです。ノブグラッド・ヴォリンスクの教師の家庭に1982年に生まれました。全ての子供時代を故郷の村で過ごしました。6歳で学校に入りました。学校では人間科学への好みがあり、得意科目はウクライナ文学と国語、英語でした。バレーボールもしました。1998年に中学校を首席で卒業し、アグロ-エコロジカルアカデミーに入りました。今、農業経営学部の2年生です。勉強はとても好きです。得意科目は英語と経済です。

語と経済です。

母は中学校の低学年の教師をしています。不幸にも、父は1994年に亡くなりました。

現在、私はジトーミルの寮にいます。母と妹は、多少の家事や小農園の経営をしています。残念ですが、家庭の財政状態は大変ひどいです。私は家にたびたび帰って、家事を助ける機会がありません。その上、母は病気がちです。特に健康状態が昨年悪くなりました。その時、チェルノブイリ事故の影響がさらにはっきりしたのです。母は全てやりこなすように努めましたが、よく疲れしました。それは、放射能が人々の健康や環境に影響を与えるからです。妹も病気がちです。

しかし、私は困難な状況にもかかわらず、事態が良くなることを望んでいます。アカデミーを卒業し、優秀な専門家になり、専門を生かして働くことを夢見ています。なぜなら、教養のある人間になることがとても大切だからです。このことを実現するために、最善を尽くします。

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部)

キエフ駐在 竹内高明)

*ウクライナ納税局と『エコノミスト』誌による調査(1999年第4四半期のデータに基づく)では、ウクライナの納税人口34%の月収は30グリヴナ(1\$=5.5グリヴナ)以下。彼らの支出は国民総支出の4%、納税額は全体の2%にすぎない。

月30~370グリヴナの収入を得ているのは55%で、

その支出は全体の52%、納税額は44%。残る11%が高額所得層ということになるが、国家統計委員会委員長は、この調査結果には疑義があると表明。(税の申告に表れた所得額は現実との差が大きいので)

(『日々新聞』3月6日号)

3月19日から25日まで、「ジュノーの会」のメンバーの方たちがウクライナに滞在、キエフとチェルニゴフ(放射線管理区域の村)で被災者の聞き取り調査と医薬品の提供(カタログハウス社の資金による)を行い、私は通訳として働きました。日給100ドル。

被災者の生活状況は、昨年の聞き取り(ジュノーの会による)に比べ改善されているとはいえません。村ではついにコルホーズが閉鎖されており、2月にブルシロフで聞いたのと似たり寄つたりの状態のようですが、スラヴチチに近いこの区域では、農産物を同市に運んで売り、現金収入を得ている家族が多く、チェルノブイリ原発閉鎖で同市の人口が減りつつある事実は、明るい要因とは言えません。地区病院の予算は、前年より削減(入院患者用の医薬品は4分の1に)されたとのことで、ジュノーの会の援助は大変感謝されていました。キエフ(プリピャチからの疎開者のクラブ)での聞き取りでは、アレクシェーヴィチ『チェルノブイリの祈り』の冒頭に出てくるイグナテンコさんの話も伺いましたが、一家4人が障害者のケース、息子夫婦を病気で失った女性が病気の孫と暮らしているケースなど重い話が多く、このクラブの存在は疎開者の精神的支えになっているようです。もともと、かつてチェルノブイリ原発から出していた金銭的援助がここ数年途絶えていたため、クラブの家賃・公共料金は滞納が続いている状況(時折、ジュノーの会を含むスポンサーが支援している)だそうです。

25日から雪が降り、また0℃前後の気温です。同日から夏時間になり、日本との時差は6時間です。

(3月28日)



< 州立小児病院グサク副院長と竹内さん >

チェルノブイリ・スタディツアー企画進行中！！

<2001. 9. 18 (火) ~9. 28 (金) >

先にご案内していますスタディ・ツアーの具体的な日程や航空ルートなど、只今交渉中です。この時期、ドイツでは各種フェアが開催されるため、ホテルが取りにくい、料金が高等などの点からウィーン経由になりそうです。費用は25万円程度を予定。

ウクライナ・ジトミル州では、チェルノブイリ被災者、奨学生などウクライナの市民との交流を予定しています。“日本デー”を設け、日本を紹介する「写真パネル展示」「ティー・セレモニー」「ミニ講演会」などの企画もあります。

ふるってご参加ください。(あと5ヶ月、カウントダウン開始！)

事務局便り

去る2月16日、郵政事業庁貯金局ボランティア貯金推進室からチェル救の団体概要・活動履歴などの質問と帳簿の監査がありました。また、東海郵政局で「国際ボランティア貯金寄附金配分団体懇話会」が開かれ、愛知・三重のNGO16団体が参加。今回特に強調されたことは、①過去5年以上継続した事業は、最長3年以内に援助を打ち切る、②新年度から始まった事業は、最長5年で打ち切る。継続して申請する場合、「過去の事業内容の自己評価」「継続の意義」「現地の自立にどういふ計画を持つか」などを求められました。

もし打ち切られた場合、援助内容は大きく制限されることとなります。カンパによる自己資金(現在予算の約60%~70%)の拡充が求められます。皆様よろしく願ひいたします。

読者の便り

- 家族や自らも障害を抱えながら、がんばっていらっしゃる奨学生たち(私の娘と同年代です)のために、わずかですがどうぞお役立てください。(名古屋市 Iさん)
- 皆様の幸せを願っています。(島田市 Kさん)
- いつもニュースの郵送ありがとうございます。(犬山市 Mさん)
- ポレーシェを拝見、いつも感謝します。(岡山市 Tさん)
- 職場で私も子どもとかかわっているんで、他人事とは思えません。チェルノブイリの様子をまた、お聞かせください。(名古屋市 Hさん)

編集後記

☆3月4月。別れと新しい出会いの月。旅立ち、新たな門出の時季。不安と期待。わくわくドキドキときめきの時。そんなあなたを桜や菜の花、らん漫の花々が祝福。(京)

☆わか町もいよいよプラスチック容器分別が始まった。もともとゴミ分別には執念を燃やすタイプの私、夜な夜な収集したプラ容器を見て、一人ほくそえんでいたりもする。(佳)

☆昨年のお暑い夏のおかげで、大量に花粉が飛んでいるという。新鮮な朝の空気も、太陽の光で乾いた洗濯物もしっかり花粉を浴びて…気づかぬうちに被曝したような気分だ。(美)

☆「パイフォワード(可能の王国)」を観た。(それを、次の人にしてあげなさい。)

そうか!「先送り(原発を残すこと)」ではなく、「先贈り(脱原発)」なんだ。

「この映画を観てください。」…これが僕からあなたへの「先贈り」。

(J)